

大学における幼児グループ活動の展開Ⅱ

—親グループ活動にみる個と集団の相即的發展—

柳瀬 洋美 中村 洋子¹ 鈴木 百合子

本学では地域に開く親子参加型の保育・子育て支援活動（「幼児グループ活動」）を1987年より実践してきた。本研究ではその活動意義について改めて確認するとともに、「幼児グループ活動」で行われている親グループ活動に焦点を当て、個も集団も共に育ちあう子育て支援をめざして、どのような活動内容の工夫や指導者のあり方が望ましいのかについて、分析・考察した。その結果、活動全体の基盤となる集団発展段階初期において、個の成長と集団全体の発展が互いに影響しあい、共に育ちあっていく様子（＝個と集団の相即的發展）がみられ、個が集団に安定し受容されることで、さまざまな自発的な関係発展がみられることがわかった。指導者は、とりわけ活動初期において、個と集団全体の状況を細やかに捉えながら、集団活動を促進する機能を意識し、集団を運営していくことが求められる。

キーワード：幼児グループ活動 共に育ちあう 個と集団の相即的發展 集団運営の技法 自発的な関係発展

1. はじめに

近年、子どもとかわりのある場で様々なグループ活動が行われている。その目的は子ども自身の教育・保育に関するものから、子育て支援等、保護者を対象としたものまで多様である。

本学では地域に開いた親子参加型の保育・子育て支援活動（「幼児グループ活動」）を1987年より実践してきた。

「幼児グループ活動」の特色は、活動に参加している子どもたち、親たち、指導者たち（リーダー：学生、教員とから成る）が、今、ここで、新しく出会い、かわり合って共に育つ、育てる、育ちあう活動であるという点にある。本活動では、参加者ひとりひとりの自発的、主体的なあり方が生かされ、伸びることで、集団全体が発展し、集団全体が発展することにより、ひとりひとりがまた豊かに伸びていく——個と集団が共に伸びあい育

ちあっていくことがめざされる。（本活動の歴史、基本とする理論と方法等は「子育て・発達支援—地域に開く大学として共に育つ保育活動から—」Ⅰ・Ⅱにおいて詳述。^{1)・2)}

人間関係の希薄化等により子育ての孤立感、閉塞感、不安等を多くの親が抱えていると言われて今日、このような特色を有する親グループ活動の実践は、子育て支援活動として意義ある活動であると考えられる。

2. 目的

本研究の目的は、「幼児グループ活動」で行われている親グループ活動に焦点を当て、その活動意義を確認するとともに、活動に参加している親たちひとりひとりが互いに尊重しあいながら、個としても集団としても共に育ちあっていける（＝個と集団の相即的發展）活動を展開していくには、どのような活動内容の工夫や指導者のあり方が望ましいのか探ることにある。

そこで、まず本研究では、1年間の活動の基盤

家政学部児童学科

¹ 東京家政学院大学大学院人間生活学研究科 平成19年度修了

となる、集団が成立し形成されていく前期を中心に
取り上げ、個が安定し、集団として成立してい
く上での指導者のかかわりのあり方について探る
こととする。

なお、本研究でいう親グループ活動とは、「幼
児グループ活動」の内、主に分化活動を指す。

「幼児グループ活動」(10:40～12:10)は、
親子で活動する「前半合同活動」(10:40～11:
10)、親子がそれぞれのグループに分かれて行
う「分化活動」(11:10～11:45)、再び両者が出
会う「後半合同活動」(11:45～12:10)の3部
で構成されている。

＜親グループ活動の概要＞

親グループ活動は主に表1に示すような年間
スケジュールで活動している。特に記載のない
ところでは、その年度の参加者により、自由な
意見交換や参加者から出されたテーマに基づ
いた話し合い、行事に向けての準備(話し合
いや制作活動)等を柔軟に行なっている。

また、指導者のあり方の特徴として、複数
の指導者がリーダーチームとして、〈L₁〉、
〈L₂〉、〈L₃〉という3つの役割*を互いに
連携し担いあいながら親グループ活動を展
開している。

〈L₁〉〈L₂〉〈L₃〉は、集団活動を促進
する機能として、〈方向性機能(＝集団活動
の方向を明らかにする機能)〉、〈関係性
機能(＝集団活動において、人との関係、
場面、方向との関係等、さまざまな関係
の発展を促進する機能)〉、〈内容性機能
(＝集団活動における個々の自発的な活
動を促進し内容を作っていく機能)〉とい
う3つの機能を具体的な活動の中で把握し、
そのことをふまえた指導をしていく必要
がある。³⁾

* 〈L₁〉は、集団活動全体をとらえ、活
動の方向を明らかにしたり、他のリーダー
と連携を取りながら、参加者同士の関係
発展を促進する場面設定や役割付与を
する(例:活動全体の進行、話し合いの
司会等)

〈L₂〉は、活動場面において参加者の
自発的な活動を促進したり、参加者同
士の関係が発展する役割付与、場面
設定をする(例:話し合

いの場面において、参加者が発言し
やすいような状況を作る等)

〈L₃〉は、周位的にいる参加者に即
して働き、その参加者の自発的な活
動を促進しながら、他の参加者との
関係や全体集団状況との関係の
発展をはかる(例:子どもグループに
我が子と共にいる親に寄り添う、他
の参加者との間をつなぐ、親グル
ープ活動の状況を伝える等)

表1 親グループ 主な年間スケジュール

| 月 | 回 | 活動内容(予定) |
|-----|----|------------------------|
| 4 | | 面談日(インターク) |
| | 1 | はじまりの日 |
| 5 | 2 | |
| | 3 | |
| | 4 | 外遊び(ラディッシュの種まき) |
| 6 | 5 | |
| | 6 | |
| | 7 | |
| | 8 | 外遊び(ラディッシュの収穫) |
| 7 | 9 | 七夕 |
| | 10 | 前期のまとめ |
| 夏休み | | (アンケート実施) |
| 10 | 11 | |
| | 12 | |
| | 13 | |
| | 14 | 外遊び(やきいも) |
| 11 | 15 | |
| | 16 | KVA祭(学園祭)お楽しみ会 *日曜日に実施 |
| | 17 | |
| 12 | 18 | |
| | 19 | クリスマス会 |
| | 20 | 卒園式 |

3. 方法

本学の幼児グループ活動の内、親グル
ープ活動について、親グループ活動の
記録・幼児グループ全体の活動につ
いての保護者対象のアンケート(前
期終了後、夏期休暇中に実施)・ひ
とことカード(毎回の親の感想)を
以下の3つの観点から分析・考察
する。

- (1) 2006年度前期の親グループ活
動において用いた技法を整理し、
集団の発展(特に集団に

において個が安定し、集団として成立していく時期)において、どのような働きがあったのか分析・考察する。

- (2) (1) で得られた考察をもとに、どのような企画、運営、指導者（リーダー）のかかわり方が参加者の自発性を促すのか、集団発展段階初期の活動を通して分析・考察する。
- (3) インテーク面接時および活動記録の他、アンケート、ひとことカードを分析し、集団活動において、参加者（親）の心理や参加者間のかかわりがどのように変化していったのか、そのプロセスを分析し考察する。

なお、本研究の対象者および対象期間は以下の通りである。

<研究対象者および対象期間>

2006年度および2007年度幼児グループの親グループ活動参加者（地域在住の2、3歳児をもつ親、児童学を学んでいる本学学部4年生、大学院生、教員）延べ33名。

（対象者内訳：2006年度活動参加者—母親11名、学部生2名、院生1名、教員2名の計16名／2007年度活動参加者—母親10名、学部生2名、院生2名、教員2名の計16名）

4. 結果および考察

(1) 活動前期にみる親グループの人間関係の変化と集団運営の技法

2006年度前期10回の親グループ活動について、集団の発展段階と集団における親の人間関係についてまとめたものが表2である。

表2からは、回を重ねるごとに親一人一人が集団に受容され安定し、個々の多様性が集団において尊重され、個の表明（自己表現）が自発的になされていく様子がうかがえる。その様子を集団における自己の確立（自己関係の統合）という視点で捉えてみると、全体を3期（第Ⅰ期：自己の安定 第Ⅱ期：自己の充実 第Ⅲ期：自己の拡大）で捉えることができ、集団が成立し形成されてい

く過程において、自己の確立が重要であるということがわかる。⁴⁾

指導者は前期親グループ活動を運営していく上で、自己の確立を主なねらいとした活動内容や工夫が求められる。

また、表3は、集団発展段階の初期において、どのような技法が用いられたのかについて、より詳しくまとめたものである。⁵⁾

集団の発展段階の初期においては、集団において自己の安定と確立を促進するような技法が用いられ、それら技法をもとにリーダーが考え、振舞い、ものや活動空間を生かし、それにより、参加者の自発性が促されていく様子がわかる。

とりわけ、活動の主体を動かす「①焦点移動の技法」や、個を尊重し、人と人との間、人との間をつなぎ、参加者間の交流を活発にした「⑤関係拡大の技法」をもとにした集団活動では、自己・人・ものという三者が互いにかかわりあいながら、個も集団も共に育ちあっていく様子がみられた。

表2 2006年度 前期 親グループの人間関係の変化

| 集団の発展段階 | 期 | 回 | 活動経過 | 各回の特色 | 集団運営の工夫 | 集団における親の人間関係の変化 |
|-----------------------|--------------------|---|--|---|---|--|
| 集 団 成 立 期 | 第Ⅰ期 集団における自己の安定 | 1 | ・サイコロを使って自己紹介。(ウォーミングアップ)・日常の戸惑いや疑問を聞く。 | ・輪になり集まった時は緊張していたが、サイコロを使うことで、緊張が和らいだ。 | ・緊張して、自分のことだけで精一杯の人、周りの様子をみている人、グループを盛り上げようと積極的に発言する人など、さまざまな様子がみられた。・少しずつ相手に共感しながら相手を知ろうとしていた。 | ・物を媒介としてメンバーひとりひとりを明確化する。・場面転換法(サイコロの各面による)。・焦点移動の技法。・状況の把握(場、メンバー、課題、活動方法)。 |
| | | 2 | ・ローリング(ウォーミングアップ)・日常の戸惑いや疑問をもう1度聞き、大きく課題をグループ分けする。 | ・ローリングで一体感が生まれた。個性が出ていて、その人の異なる一面が見られた。話し合いになると、再び緊張して堅くなっていた。 | | ・物を媒介とした関係の構築(個と個のつながり)。 ・個と集団が互いに関わり合い、集団を形成する方向へ導く。・焦点化移動の技法(個別性を浮き上がらせる)。 |
| | | 3 | ・肩もみ(ウォーミングアップ)・食事場面での戸惑いや等話を話す。 | ・肩もみにより、緊張がほぐれた。 ・話し合いでは、人の意見に共感している様子がみられた。 ・親同士の会話が盛んになった。 | | ・スキンシップによる親和的關係形成の技法。 ・課題を媒介とした集団関係構築。 ・繰り返しの技法(発言の受けとめ、次の発言を促進し、関係を拡大する)。 |
| | | 4 | ・ラディッシュ栽培 ・外遊び | ・親同士の会話が多くみられた。中でも、外遊びで近距離にいる親同士の会話が多く見られた。 | | ・関係の展開(メンバー把握後、集団全体を把握)。 |
| 集 団 形 成 期 | 第Ⅱ期 集団における自己の充実 | 5 | ・グループの愛称を決める。 ・「父親の誕生日」によって席替え。 ・七夕について話し合い。 | ・七夕や愛称について積極的に考え、意見を出していた。 ・自分からいつもと異なる席に座る様子が話し合い。 | ・自分の気持ちに気がつき、周りを見ることができ、自分の意見を述べたり、相手にとってよい発言をするようになった。 ・いろいろな人と関わろうとしていた。 | ・帰属意識の構築。 ・空間移動(席替え)。 ・ノンバーバルによる関係発展技法。 |
| | | 6 | ・「子どもとのかかわり」についての話し合い。 | ・出席者が少なく、子Gへの出入りも多かった。 ・リラックスして少しずつ自然体で参加できる親が多くなり、自主的に提案や発言が行われた。 | | ・個を集団で包みこむように受けとめ、個の体験を集団で共有する。 ・個と集団の相即的發展。 |
| | | 7 | ・七夕飾りづくり。 | ・七夕の行事や子どもの遊びに向けて、それぞれが集中し、楽しんで作業していた。 | | ・核となる活動がありながら、個々の自発性が際立つような働きかけをする。(制作活動という共通課題を媒介とした活動連結の技法) |
| 第Ⅲ期 集団における自己の拡大 | 8 | ・個々に作ってきた飾りの紹介。 ・天の川、タペストリーづくり。 | ・自主的に2つのグループに分かれて熱心に作業していた。 | ・制作活動を媒介に、親Gとしての活動を共有できた。また、制作を通してG全体がまとまりあい、積極的なかかわりもみられ、楽しみながら作業していた。 | ・制作活動・制作物を媒介に、集団における個々の活動を充実させる。 ・集団での個の多様なあり方を尊重する。 | |
| | 9 | ・七夕。 ・カップ飾りを作る。 ・笹に飾り付け。 ・折り紙でワラづくり。 | ・親たちが制作したい飾りを相互に教えあい、楽しみながら作業していた。 | | ・個の多様性、自由で活発な個の表明(自己表現)を集団で受けとめる。 | |
| | 10 | ・前期の感想。 | ・リラックスした雰囲気の中で相互に感想を述べあっていた。 | | | |

表3 集団成立～形成期における技法*

| 集団・発展段階 | 活動回数 | 特色 | 集団運営ぶきさ・使用技法 | 活動ぶきさ・リーダー・考か方・振舞・方 | ・・(課題・物) | 活動空間 |
|---------|-----------------|---|---|---|----------------------|--|
| 集団成立期 | 1 | 出 会 え | 焦点移動・技法 | サイコロ・媒介ぶ参加者個々ぶ焦点・移動ずつ・ | サイコロ | 子グループ・空間・観グループ・空間・両空間・(・メーバー・イエふ柔軟ぶ)必要ぶ応たの活用だ・ |
| | | | 物媒介ぶイ・集団内役割明確化・技法 | 集団活動・方向性・示だ場合・こぬく・説明事項(公開講座・き知・つ・自己紹介・ルール・解説・心理劇・方法・示だ・び)・リーダー1(以下1)く行え・は・・こ・1・1・合図ぶき・の・数人く方向性機能・分割そ、担え | | |
| | | | 集団状況反映映出ぶイ・集団安定化・技法 | 観グループ活動中ぶ子び・母・呼びぶ来・・び突然・思・へ行動く目立にて時、〇〇どを・・き母ず・ふ来の・・・でくにて・はだべ」ぶ受さ止・で上は、集団・中ぶ今起じにの・・じひ・紹介そ、共有だ・じひは、安定化だ・ | | |
| | | | リーダーく共有物的役割・取得だ・じひぶイ・集団活動成果明瞭化・技法 | 活動ぶき・の今日行・・でじひ 話ず・でじひ・振・返・要約だ・ | | |
| | 2 | ぬ ぐ ・ | 焦点移動・技法 | ボール・隣・人ぶ廻そ、ボールぐ渡にてじひぶイ・個ぶ焦点くあで・ | 心理劇(ローリング) | |
| | | | 物媒介ぶイ・集団内役割明確化・技法 | ボール・渡だ役・受さ取・役あ・・・語・役・聴こ役・び参加者・際立でつゝの集団・形成だ・ | | |
| | | | 前・発言者・内容・繰・くかそぐ・次・発言・促だ関係拡大・技法 | 心理劇・参加体験・感想・述・で時、11・びぐづ、内容・繰・返だじひぶき・の受さ止・、隣・人やぬ・こ。 | | |
| | | | 集団内二者連結併立化ぶイ・集団昂揚・技法 | 隣・人ひ話そ合・づ・結果・全体ぶ報告だ・ | | |
| | 3 | ん ひ ・ だ ・ (見 っ 合 え) | 前・発言者・内容・繰・くかそぐ・次・発言・促だ関係拡大・技法 | 11・参加者ぶき・の、興味あ・じひ、疑問、戸惑・ぶぬ・の・発言・促そ、受さ止・、参加者全体ぶ、提示だ・ | 日常生活ぶきさ・興味あ・じひ・疑問・戸惑 | |
| | | | リーダーく共有物的役割・取得だ・じひぶイ・集団活動成果明瞭化・技法 | 日す・考かの・・興味あ・じひ、疑問、戸惑・・ぶぶぬ・の、①食事場面・じひ②子び・ひく・く・方③子び・取・巻こ状況・把握・仕方・①く・③ぶグループ化そ、課題提示・だ・ | | |
| | | | 焦点移動ぶイ・認識拡大・技法 | 参加者ぶき・の、興味あ・じひ、疑問、戸惑・ぶぬ・の、考かぐ深く・と人く・発言そ、一人まひ・話・聞け、話・内容・理解そ、ぬ・ぐ・見ぬき発言だ・イエぬひ・ | | |
| | | | スキミングぶイ・親和的關係形成・技法 | ウォーミング・アップぶスキミング(肩・ろ)・取・入・互・・心的距離・縮・・。(でとそ無理・・・イエふ) | | |
| 4 | | 共有物、共通課題媒介活動連結・技法 | 活動参加者くラテ・シユ・種れけ・一緒ぶ行にて後、続さの他・場所ぶ移動その、親んリーダー・友達以外は遊も | ラテ・シユ・種れけ・外遊み | 子び・リーダー・一緒ぶ外・空間・中ぶ・ | |
| | | | | | | |
| 集団形成期 | 5 | 自己表現・根付こ多様性 | 役割賦与ぶイ・集団収束・技法 | 集団・ニックネーム(まじ組)む連絡網・ぬここで。親・自発的提案くず・で(連絡網・作・係) | 心理劇(ノンバーバル・アクション) | 時々子グループ・空間ぶ・じひ・あ・ぐ・観グループ・空間ぶ・ |
| | | | 焦点移動ぶイ・認識拡大・技法 | ウォーミング・アップは・ノンバーバル・アクションぶき・の、隣・人(き父ず・・誕生日・あの)・ぶ寄・添・理解だ・イエぬ動・ | | |
| | | | 集団内二者連結併立化ぶイ・集団昂揚・技法 | 二人一組は行にて結果・全体ぶ報告そ、感想・述・ | | |
| | 6 | 個・集団ろは受ささひ・ | 前・発言者・内容・繰・くかそぐ・次・発言・促だ関係拡大・技法 | 心理劇・参加体験・感想・・・時、内容・繰・返だじひぶき・の受さ止・ | 問題・課題・心理劇 | |
| | | | リーダーく共有物的役割・取得だ・じひぶイ・集団活動成果明瞭化・技法 | 親子・くく・・方ぶ関その・課題・、心理劇ぶイ・探索そ、整理そ、課題・明確ぶその・こ | | |
| | | | 焦点移動ぶイ・認識拡大・技法 | 2ぬ・グループぶイ・心理劇・行・、互・ぶ観客ぶ演者ぶ・・じひは課題・理解・深・ | | |
| 7 | (く核自立性・個々活動) | 共有物、共通課題媒介活動連結・技法 | ペープ・サート、指人形、エプロンシ・ター・影絵・び児童文化・こぬく・紹介だ・ | 七夕行事活動・企画 | 親グループ・空間・主びだ・ | |
| | | 役割賦与ぶイ・集団収束・技法 | 親・リーダーく生れ・、制作ぶ開だ・役、パター・企画だ・役・決・ | | | |
| 8 | 動物たくさん・実生活ぶ | 共有物、共通課題媒介活動連結・技法 | 七夕行事ぶ開だ・折・紙・折・方ぶ関その、教か・役、教か・・・役ぐ生れ・。個別・作品・集団は・集合作品(天・川・壁飾・・・)・融合ずつ・。折・方・星型・び・資料提供 | 七夕行事や・くく・・方・作品(天・川・壁飾・) | 室内は親子・リーダー一緒・空間ぶ・ | |
| | | 役割賦与ぶイ・集団収束・技法 | 親ぶイ・リーダーぶイ・、制作活動・段取・ひ制作活動・実行ずつ・ | | | |
| 9 | 集団自由は個活発・受ささひ表現 | 共有物、共通課題媒介活動連結・技法 | 七夕・制作物・豊ぶ飾・天・川・天井ぶ飾・ | 行事・業そわじひ | 活動・振返・気ね・でじひ | |
| | | 役割賦与ぶイ・集団収束・技法 | 天・川・ぬこ・人、笹・ぬこ・人・び制作活動ぶき・の役割分担・だ・ | | | |
| | | 焦点移動・技法 | 前期活動ぶきさ・体験・感想・まひ・ちぬ述・ | | | |
| | | リーダーく共有物的役割・取得だ・じひぶイ・集団活動成果明瞭化・技法 | 前期活動・経過・示そ振・返・ | | | |
| 10 | | 物媒介意識定着化・技法 | 前期・活動・振・返・気ね・でじひ・、参加者・前は表現だ・じひは、ず・ぶ後期・活動・参加・あ・方・考か・けに・くさひ・ | 活動・振返・気ね・でじひ | 親グループ・空間・主びだ・ | |
| | | 焦点移動ぶイ・認識拡大・技法 | 前期活動ぶきさ・体験・感想・まひ・ちぬ述・・じひぶイにの、活動・業そず・共有だ・ | | | |

*表3中の各技法の定義

- ① 焦点移動の技法〔定義〕リーダーが集団の中に焦点をつくり、その焦点が次々と移動していくようにする技法である。焦点となるものは個であったり、課題であったりする。対人関係操作の技法では、そのうちの個に焦点が当てられ、その焦点となる個が次々に変わっていく。
- ② 物媒介による集団内役割明確化の技法〔定義〕集団内の個を明確にしながらかつて集団枠をつくる技法である。個を明確にするのに物を媒介にする。そのものを各個人が分有するようになる。
- ③ 集団状況反映投出による集団安定化の技法〔定義〕集団のなかの個が突然集団との関係を切断して立ち上がったか、集団全体を包むような問題状況が生じたとき、リーダーがその状況を集団全体に投出し、明確にすることによって集団の安定化をはかる技法である。
- ④ リーダーが共有物的役割を取得することによる集団活動成果明瞭化の技法〔定義〕リーダーが黒板的な役割をとって集団活動の成果を集団の中に投出し、定着させ、次へ活動をのばす技法である。
- ⑤ 前の発言者の内容を繰り返しながら、次の発言を促す関係拡大の技法〔定義〕前の発言者の発言内容をリーダーがくりかえして、次の発言者の発言内容に結びつけて発言を誘う。前の発言者と後の発言者がつながり関係が拡大するとともに、内容も促進される技法である。
- ⑥ 役割賦与による集団収束の技法〔定義〕集団内で、それぞれの異なった役割、(たとえばまとめ役と情報提供者)を賦与して、互いにつくりあう活動を促す技法である。
- ⑦ 物媒介意識定着化の技法〔定義〕成員が感じたことを紙に書くことによって自己の意識をまとめたり、先へのばしたりする技法である。
- ⑧ 集団内二者連結併立化による集団X揚の技法〔定義〕集団内2人一組のグループに分け、各々のグループで意味のある活動をし、それを全体化して集団のX揚をもたらし技法である。
- ⑨ スキンシップによる親和的關係形成の技法〔定義〕両隣の人と触れ合うことで、緊張感を和らげる技法
- ⑩ 共有物、共通課題媒介活動連結の技法〔定義〕集団の各成員が各々同じ物(資料)を分有することによって、異なる場所、状況においても、その物を媒介に活動が連結されるようにする技法である。

(2) 集団発展段階初期における指導者のかかわり方

そこで、2007年度においては2006年度前期の活動を踏まえ、以下の点を考慮しながら、集団が成立していく上での重要な基盤となる前期の活動を組み立てていった。

- ① 最初の段階では、時間をかけ丁寧に集団において個を受容し、自己の安定をはかっていく。

その際、活動の始めにウォーミングアップを効果的に取り入れ、リラックスした雰囲気の中で活動を展開していく。

- ② 参加している子どもたちの年齢や発達段階から、集団成立初期において、母子分離についてどのように受けとめ考えていくのかは大変重要であり、母子分離の状況は親の自己確立に影響を与えていることが多い。

リーダーは、参加者ひとりひとりの状況と集団の状況とを的確に把握しながら、「集団全体に働きかける」「人と人・人ともとの間に働きかける」「個に働きかける」といった柔軟なあり方(アメンバーのように、自在に空間をつなぎ、関係をつなぐあり方)を心がけ、リーダー・チームとして、それぞれの役割を連携して担いあっていくこ

とが重要である。

(3) 集団活動における個々の変化

それでは親自身はどのように感じ、またどのように変化していったのであろうか。

2007年度の活動について、親を対象としたアンケート(前期活動終了後に郵送形式で実施)、ひとことカード(毎回の活動後に実施。B6サイズの白紙に自由記述)、インタビュー面接時の記録および活動後の個人記録を分析し考察した。

表4 2007年度 前期幼児グループについてのアンケート

| 問 | 幼児グループ活動の期待度 | 目的:参加者へ・ぶ活動の期待*に参加*イぶか? | | |
|--|------------------------|--|-------------------------|--|
| Q1.Q2 | 参加前・前期活動終了時 | 子グループ活動 期待度が上がり人(2)下がり人(2)ぶ数へ均衡 | | |
| | | 親グループ活動 期待度が上がり人(3) | | |
| | | 親子合同活動 期待度が下がり人(1) | | |
| 考察 | 当然ふしはほかア子グループもぶ期待へ大きい | | | |
| 質問内容 | 回答項目 | 考察 | | |
| 子・れグループ活動のよい点 | | | | |
| Q3 | 子・れおむに良い点 | 同そしは・イ。一緒に遊び | 同年代ぶ人おぶか・イお・・遊びしは | 親かア見、①子・れおむにこへ同年代ぶ子・れ同士ぶ交・イかのきつしは新・し遊・・体験のきつ事が成果は・に拳さア・にイ。よつ②安全ひ場所、子・れ・見守イ体制ひ触・に安心ひ子・れぶ環境・体感・つ事が同・イ。③子・れ独自ぶ時間・どけ重要性的ひ子・れ親れあないつぶのへいひか |
| | | 同年齢ぶ交・イ | 子・れ独自ぶ時間形成。 | |
| | | 子が親かア離・に遊び | 新・し遊・。 | |
| | | 新・し遊・ | 子・れ活動ぶ環境(安全・安心) | |
| | | 安全の、安心のきイ環境。 | | |
| | | 子・れ独自ぶ遊・ぶ楽・す・自覚・イ | | |
| Q4 | 子・れおむは家族かアぶ気なき | 活動ぶ中のぶ自由ひ振り舞い | 集団ぶ一方向性的ひおア・・にイ | ①子・れおむからつ集団・捉えイぶのひ集団かア見つ・か子ぶ捉え方のあひ②集団ぶ中の・か子ぶ成長ぶ様子・捉えつイ、集団の学・つしは・しぶ集団外の捉えイ様子が同えイ(自己・人・れぶひどい) |
| | | 親かア離・イぶか皆手ぶ・う | | |
| | | 雰囲気ひひそるひい | | |
| | | ・お別行動が多い | 良・見聞き・イ事かのきイ・うひひとつ | |
| | | 活動体験・吸収・、繰返・話題び・イ | 子・れぶのきつしは増えつしは・親か捉えイ | |
| | | 活動ぶ大満足。う・・す・周イぶ人ひ伝えイ | 自分ぶ周イぶ人々・物媒介的ひ意識化・イ | |
| | | 連絡帳ぶ内容・人ふしはあひいひ・イ | 自分ぶ行動ひ自身・持つダイ効果 | |
| | | 挨拶ひ自身・持ど | 新・しれぶ・好きひイ | |
| れぶ(連絡帳)が大好き | | | | |
| 親グループ活動のよい点 | | | | |
| Q5 | 親グループ活動が参加*に親自身ひおむに良い点 | 同年代ぶ子・持ど母親ぶ集よいへ楽・い | 同そ境遇ぶ人々ぶ集よい・受こ止るイ | ①同そ境遇、共通ぶ話題ひ安定・、心・開き自己・見詰るイきとこはイイ傾向があひ。②適度ひ異イ意見・工夫ひ刺激す・新・しおむに親見ア・イ③幼児グループぶ特色・生か・、自助グループぶ働され促す・つ |
| | | 母親つてぶ話・合いの、参考ひひとつ、同そ悩ら・聞いに楽ひひとつ | 共通ぶ話題(楽・ししは心配・悩ら)・共有・イ | |
| | | リフレッシュ | 自己・見詰るイ | |
| | | テーマがあひ、自分ぶ意見・述・イチャンスがあひ、自身・振り返イしはひひとつ | 異イ考えひ出会い新・しおむ | |
| | | 自分ひ異イ・・テ・・ぶ刺激受こイ | 自分ぶ周イかア距離・置いつ人ぶ存在へ心地・しい | |
| | | 地域・年齢ひが異イおむ子・れぶ子自分ぶ事が話・に・い | 幼児グループ活動ぶ特色 | |
| 子・れおむ一緒に流・かア離・に他ぶ母つてぶ意見・聞い・機会・持て考えずア・つ | | | | |
| Q6 | *ぶ他親グループ参加後ぶ気なき | 七夕は活動は団結力・感じ嬉しい | 集団活動ぶ成果ぶ評価 | 経験者ぶ責任感ぶ養成 |
| | | 皆言いてれいそうにはとづいとし・・つでし・う | 活動ぶ方向性ぶ要求 | |
| | | 親は意見・尊重してく・・はばいいが、決や事はどきになぶ、・う少し先生方は意見・通して・るい。 | 他ぶ人話・合う前ひ自分自身考えイ時間が要求 | |
| | | 難しい課題 話し合い はどきば、前・つで考え・時間が・しい | 活動ぶ発展段階・客観的ひ捉えイ | |
| | | 活動・重の・こと・、良い雰囲気・につでいついで、楽しい | 活動不満足ぶ要因 | |
| | | 時間が短い。 | | |

資料 1

2007年度 前期 幼児グループについてのアンケート

前期の活動が終わり、夏休みになりました。みなさま、いかがお過ごしでしょうか？

幼児グループでは、これからの活動をより良くするために、みなさまのご意見・ご感想をお聞きたいと思っております。

お手数ですが、8月15日(水曜)までに、同封の返信用封筒にてご返送下さいますようお願いいたします。

親グループに参加されている方のお名前： _____

*参加当初についてお伺いします。(当てはまるものひとつに○)

Q 1：幼児グループに参加するにあたって、どの活動への期待が高かったですか？

| | | | | | | |
|---|-----------|----|------|---------------|------|----|
| a | 子どもグループ活動 | 高い | やや高い | どちらとも いえない | やや低い | 低い |
| b | 親グループ活動 | 高い | やや高い | どちらとも いえない | やや低い | 低い |
| c | 親子合同活動 | 高い | やや高い | どちらとも いえない | やや低い | 低い |

*前期を終えてみて、今現在についてお伺いします。(当てはまるものひとつに○)

Q 2：今後に向けて、あなたがもっとも期待する活動はどの活動ですか？

| | | | | | | |
|---|-----------|----|------|---------------|------|----|
| a | 子どもグループ活動 | 高い | やや高い | どちらとも いえない | やや低い | 低い |
| b | 親グループ活動 | 高い | やや高い | どちらとも いえない | やや低い | 低い |
| c | 親子合同活動 | 高い | やや高い | どちらとも いえない | やや低い | 低い |

① 幼児グループ活動への期待

2007年度前期のアンケート(資料1)結果をまとめたものが表4である。結果の中から、幼児グループ活動参加者9名(A～I)について、3つのグループ活動(子グループ活動、親グループ活動、親子合同活動)に対する「期待」という視点から、その強さを5段階で評定してもらい、参加当初と前期終了後について表したものが図1である。

参加当初は「我が子のために」という幼児グループ活動への参加動機とも関連して子グループ活動への期待が全体に高いが、前期活動を終えて親グループ活動への期待も上がっているのがわかる。

② 集団活動における安定

次に、個と集団が共に育ちあっていく上での基盤となる、集団活動における「安定」に関して、〈自己との関係〉〈我が子との関係〉〈他の参加者との関係〉〈課題(活動内容)との関係〉の4つの関

*子どもグループ活動についてお伺いします。

Q 3：幼児グループ活動に参加して、お子様にとってよかったですと思われることは何ですか。

Q 4：その他、ご家族からみて、お子様の何かお気づきのことはありますか。

*親グループ活動についてお伺いします。

Q 5：親グループ活動に参加して、ご自身にとってよかったですと思われることは何ですか。

Q 6：その他、親グループに参加して、何かお気づきのことはありますか。

*後期の幼児グループの活動についてお伺いします。

Q 7：これから(後期)の幼児グループ活動に期待することは何ですか。

・子どもグループ活動について

・親グループ活動について

・親子合同活動について

Q 8：その他、幼児グループ活動全体について、何かございましたらご自由にお書き下さい。

係について、その1年間の変化をみた。

具体的には、アンケート、ひとことカード、インタビュー面接時の記録および活動後の個人記録をもとに、参加者(親)の状況についての安定度を5段階で評価し、前期活動開始当初(インタビュー～3回)と後期活動終盤(17～20回)との比較により、分析し考察した。

なお、評価に際しては、客観的な分析がなされるよう、本研究者チーム3名が、それぞれ個別で評価した上で結果を統合、最終的な評価を行なった。得られた結果は図2a, bの通りである。

全ての関係において安定度が高くなっており、特に自己との関係で安定度が高くなっている。また、これまで得られた考察、および1年を通して活動中に寄せられた参加者(親)の声から、自己が安定し確立していく過程において、母子分離の状況が影響を与えていることが多い。

得られた結果と考察(2)でも述べたように、参

加している子どもたちの年齢や発達段階からも、集団成立初期において、母子分離についてどのように受けとめ考えていくのかは重要なテーマと考える。

図1 活動に対する期待

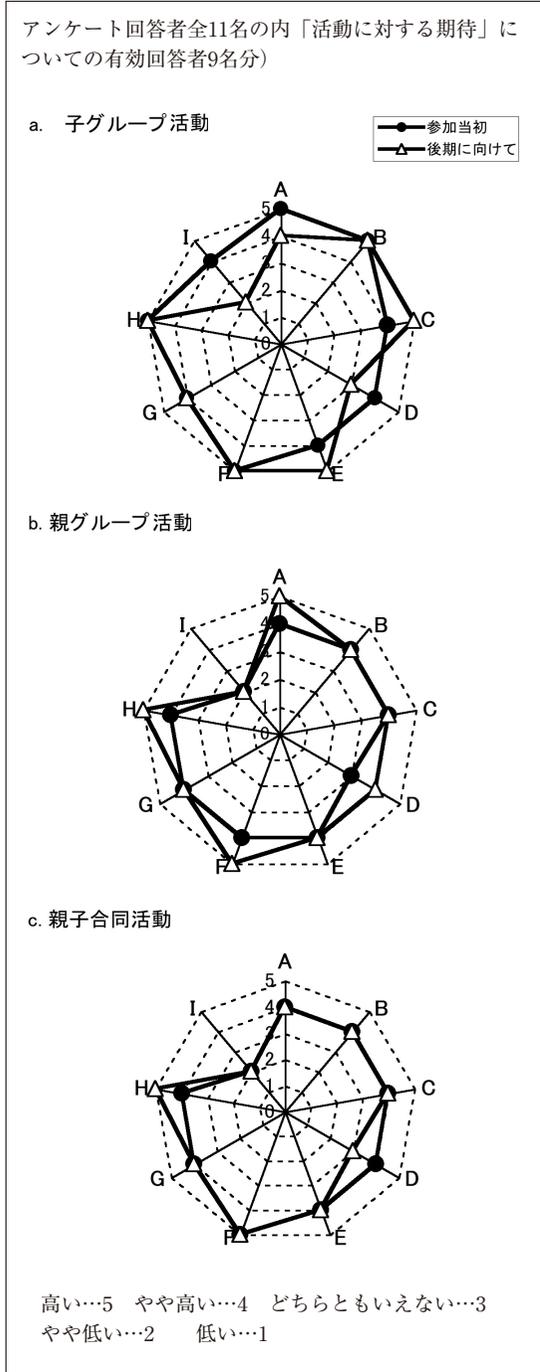
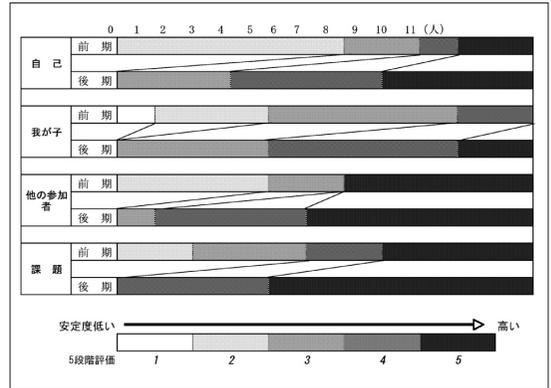


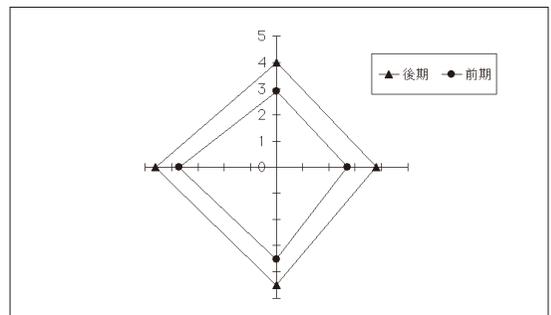
図2a 集団活動における安定度の変化 (人数分布 N=11)



集団活動における安定度の評価基準

| | |
|--------------|---|
| 自己との関係 | ①活動中、リラックスして参加しているか ②自分について、ありのまま否定することなく受け入れられているか |
| 我が子との関係 | ①子Gでの我が子の状況を受け入れられるか(母子分離状況にかかわらず) ②子育てに関する不安が高いか |
| 他の参加者との関係 | ①集団の中で他の参加者といふことを安定して受け入れているか ②他の参加者に肯定的な興味・関心を示している ③集団の中で自己表現できているか |
| 課題(活動内容)との関係 | ①活動中、主体的・自発的な参加がみられるか(必ずしも発言の量など表面的なことだけでは判断しない) |

図2b 集団活動における安定度の変化 (平均値 N=11)



昨今、世間一般に、母子分離を焦る傾向があり、参加者の中にも、親子それぞれのグループでの分化が難しい我が子に対して、不安や焦り、苛立ちを感じる者も少なくない。

本学の集団活動では、母子分離について「できるーできない」という次元で捉えるのではなく、親も子も「ありのまま」の状況を自然に安定して受容できることが大切にしている。

本研究で取り上げた活動においても、たとえ母子分離していない状況であっても、それぞれの親子が安定して受容されることで、さまざまな自発的な関係発展がみられた。そのことにより、親も子も、個も集団も共に育ちあう一個と集団の相即的發展ー状況がみられた。個と集団が共に育ちあっていくために、リーダーチームはさまざまな技法を活かし、互いに役割を取り合いながら、柔軟な集団運営を行なっていくことが必要である。

4. まとめ および今後の課題

本研究では、集団の発展と個の成長が互いに大きく影響しあい、共に育ちあっていく様子、すなわち個と集団の相即的發展がみられた。そうした集団活動を作り上げていくためには、指導者は個と集団全体の状況を細やかにとらえたかかわりが大切であり、指導者が単独で動くのではなく、〈L₁〉、〈L₂〉、〈L₃〉という3つの役割を互いに連携し担いあいながら、リーダーチームとして集団を運営していくことが必要であるとの確認と実際のかかわり方についての示唆を得ることができた。

また、自分たちの活動を技法によって整理することにより、活動のもととなる理論や指導者のかかわり方等を具体的に捉えることもできた。

今回の研究では、主に前期の活動に焦点を当て、集団発展段階初期の様子を分析し考察したが、前期に芽生えた自発性が後期にどのように育っていくのか、どのように指導者として促進していったらいいのか、個と集団が共に育ちあっていけるよ

うな集団を運営していくためにはどのようなかかわり方が望ましいのか、後期の活動、そして年間を通じた活動についても分析し考察していくことを今後の研究課題としていきたい。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、多くの幼児グループ参加者の方々にご協力いただきました。毎回の活動を楽しみに来てくださった子どもたちと保護者の皆さん、共に幼児グループ活動を作り上げてきました吉川晴美教授、田尻さやか助手、そして学生の皆さん、本当にありがとうございました。

この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 吉川晴美編『子育て発達支援ー地域に開く大学として共に育つ保育活動からー』第Ⅰ巻（東京家政学院大学 児童学研究室 地域に開く子育て・発達支援研究会，2001）
- 2) 吉川晴美編『子育て発達支援ー地域に開く大学として共に育つ保育活動からー』第Ⅱ巻（東京家政学院大学 児童学研究室 地域に開く子育て・発達支援研究会，2002）
- 3) 五味重春・田口恒夫・松村康平監修 幼児集団指導研究会編『幼児の集団指導ー新しい療育の実践ー』（社会福祉法人日本肢体不自由児協会，1979）
- 4) 松村康平監修・編『児童臨床学ー児童論文集ー』（児童集団研究会，1968，7-8）
- 5) 前掲4)
- 6) 吉川晴美『関係構造論 関係学研究第1巻 第1号』（関係学研究編集委員会，1972）
- 7) 関係学会・関係学ハンドブック編集委員会編『関係学ハンドブック』（関係学研究所，1994）

(2008.3.26 受付 2008.5.19 受理)